



山陽小野田市
SANYO ONODA CITY



平成 26 年度 山陽小野田市中学生海外派遣事業 帰国報告書

平成 26 年 8 月 14 日(木)～8 月 25 日(月)



山陽小野田市

目次

中学生海外派遣事業概要	2
1 目的	
2 派遣先	
3 派遣期間	
4 派遣生徒及び引率者	
5 スケジュール	
活動日誌	4
ホームステイ報告及びホストファミリーの紹介	7
・派遣生徒	
・引率者	

◆中学生海外派遣事業概要

1 目的

山陽小野田市と姉妹都市モートンベイ市との交流を図り、もって両市の友好親善と相互理解を深めるとともに、広い視野と国際感覚を持った次代を担う人材を育成することを目的とする。

2 派遣先

オーストラリア クイーンズランド州 モートンベイ市



3 派遣期間

平成26年8月14日（木）～8月25日（月） 12日間

4 派遣生徒及び引率者（敬称略）

かのう 加納	れい 玲以	埴生 中学校3年	まつばら 松原	いずみ 泉	小野田中学校3年
なかの 中野	みすず 未涼	高千帆中学校3年	やまもと 山本	りほ 里穂	厚陽中学校3年
ふきあげ 吹上	みく 実来	厚狭中学校3年	きたやま 北山	さくら 桜	高千帆中学校教諭
ふじい 藤井	ななこ 菜々子	竜王中学校3年			



5 スケジュール

《事前研修》

第1回オリエンテーション	6月24日（火）18:30～	市役所3階大会議室
第2回オリエンテーション (宿泊研修)	7月23日（水）13:30～ 24日（木）12:00	きらら交流館1階研修室
結団式	8月 6日（水）10:00～	市役所3階大会議室
第3回オリエンテーション	8月 6日（水）結団式終了後	市役所3階大会議室



《オーストラリア派遣》

- 8月14日（木） 市役所～福岡空港（出発）～チャンギ空港（シンガポール、乗継）～
- 8月15日（金） ブリスベン空港（到着）～モートンベイ市へ
レッドクリフハイスクールにて歓迎式。終了後校内で過ごす。
- 8月16日（土） ホストファミリーと過ごす。
- 8月17日（日） ホストファミリーと過ごす。
- 8月18日（月） アルマパーク動物園及び州都ブリスベンを社会見学。
- 8月19日（火） 午前スカーバラ小学校（※1）、午後ハンピーボング小学校（※2）を、それぞれ訪問。
- 8月20日（水） レッドクリフハイスクールで授業。
- 8月21日（木） レッドクリフハイスクール日本文化デー。
- 8月22日（金） レッドクリフハイスクールで授業。
- 8月23日（土） ホストファミリーと過ごす。
- 8月24日（日） ブリスベン空港（出発）～チャンギ空港（乗継）～
- 8月25日（月） 福岡空港（到着）～市役所

※1スカーバラ小学校は高千帆小学校の姉妹校

※2ハンピーボング小学校は赤崎小学校の姉妹校

《帰国後》

- 帰国報告会 9月25日（木）17:00～ 市役所3階大会議室

活動日誌

日付	報告者	活動内容
8/14 (木)	加納 玲以	5時45分市役所集合。バスで福岡空港へ向かい初めての飛行機に！飛行機に乗る前に日本円をオーストラリアドルに両替した。福岡から約7時間かけてシンガポールのチャンギ空港に到着。チャンギ空港では6時間の待ち時間があった。その間は買い物をしたり、ご飯を食べたりして過ごした。
8/15 (金)	松原 泉	朝7時過ぎにブリスベン空港に到着した。睡眠不足でハイスクールに向かうマイクロバスの中で寝てしまった。日本語の授業に参加し自己紹介をした。バディのDonnaと対面し放課後はホストファミリーが迎えに来てくれた。夕食は私が事前にリクエストしていたミートパイを作ってくれた。温かく迎えてくれてうれしかった。
	中野 未涼	朝9時ごろ学校に到着。ハイスクールの生徒と一緒にフリスピ一先生の授業を受けた。英語が早くてわけがわからなかった。もっと勉強してくれればよかった。授業の後ホストファミリーと会った。とても優しく親切だった。
8/16 (土)	吹上 実来	ホストファミリーとの初めての休日は、家族みんなとバディのJulietの彼氏と一緒にサークルに行った。その時、ポップコーンや、綿菓子、おもちゃなどを買ってもらった。日本ではサークルに1回しか行ったことがなかったので、楽しみにしていた。こちらのサークルは、日本のサークルの技やピエロなどと色々違ったので、楽しんで見ることができた。
	山本 里穂	ホストファミリーと買い物に行った。明日ビーチバレーをするので、そのためのボールを買ってもらった。その後、バディのジョディ、ホストマザー、ジョディの姉のキンベリーの4人でボーリングに行った。夕食はレストランで、なんとカンガルーの肉とワニの肉を食べた！！初めての体験でドキドキしたけれど、カンガルーは牛肉に、ワニは鶏肉に似ていた。どちらもおいしかった。
8/17 (日)	藤井 菜々子	ホストファミリーとクイーンズランド大学のオープンキャンパスを行った。そこでコアラの赤ちゃんを見た。目がクリクリしていてとても可愛かった。ウォンバットやゴアナ（オーストラリアオオトカゲ）にも触った。獣医学部の施設の中で治療や検査の様子を見せてもらった。夕食は日本料理の店に行き、焼きそばを食べた。その焼きそばの名前は”かしこい焼きそば”だった。他にも“がんばるカツ丼”などおもしろい料理名のものがたくさんあった。
	吹上 実来	今日は海の近くの公園に行った。その時に、少しお土産を買った。買ったとき、お釣りが足りなかつたので、バディのJulietがお店の人に言いに行ってくれた。自分の事ではないのに、私のために言いに行ってくれたことがうれしかった。

日付	報告者	活動内容
8/18 (月)	加納 玲以	今日は10年生(高校1年生)とブリスベン観光に行った。初めにシティーキャットに乗った。風がとても強かったけど楽しかった。動物園では、カンガルーに餌をあげたり、コアラを見たりした。初めて見る動物もいてウォンバットとタスマニアンドビルなどオーストラリア特有の動物を見てることができて良かった。バディのカーラは年上だったがすぐ仲良くなることができた。
	中野 未涼	今日はレッドクリフの生徒と一緒に、アルマパークとブリスベンを観光した。動物園には見たこともない動物がたくさん居て、コアラやカンガルーも間近で見ることができた。ブリスベンはとても高い建物がたくさんあった。
8/19 (火)	松原 泉	今日は風邪をひいてしまい学校を欠席した。家でバディと一緒にハリー・ポッターを見ておとなしくしていた。ホストマザーは様子を見に仕事から早く帰ってくれ、フリスピ一先生も家庭訪問をしてくれた。その後、北山先生からも家に電話がかか迷惑をかけて申し訳ない気持ちでいっぱいだった。
	藤井 菜々子	スカーバラ小とハンピーボング小を訪問した。スカーバラ小では、授業を受け、生徒たちと一緒に昼食を食べた。ハンピーボング小では自由時間に校内を案内してもらった。日本人のお母さんを持つ女の子と仲良くなり、私が言葉で困っている時に通訳をしてくれたおかげで、たくさんの生徒と交流することができた。夕方、ホストマザーの職場に行き、救急車の中を見せてもらったり、ユニフォームを着せてもらったりした。救急車は日本のものよりカラフルだった。
8/20 (水)	吹上 実来	今日は、学校の授業に参加した。よりによって、私が1番苦手な数学だったので心配だったが、隣の生徒がヒントをくれたり、褒めてくれたりしたので、嬉しかった。
	松原 泉	今日は英語と数学の授業を受けた。数学は計算が早いと隣の生徒に驚かれた。パソコンを使った英語は難しくてついていけなかった。放課後にホストファミリーに競馬場へ連れて行ってもらった。レースを見たのは初めてだったのでとても興奮した。
8/21 (木)	山本 里穂	今日は、ジャパンカルチャーデイだった。ホストファーザーが得意の空手を披露してくれて、とてもかっこよかった。私たち派遣生6人は、練習した“よさこい”を踊った。鳴子の音に合わせて、たくさんの人人が踊りの輪に加わってくれたことが嬉しかった。
	藤井 菜々子	日本文化の日。私たちは鳴子を使った”よさこい”を披露した。生徒たちは最初からすごく興味を持って見ててくれて、2回目はたくさんの生徒たちと一緒に踊った。巻き寿司を作ると聞いていたのに、リンゴとお菓子が出てきた。帰ってからホストファミリーに「巻き寿司食べられなかつた。悲しい。」と話すとお父さんが巻き寿司を食べるため大きな店に連れて行ってくれた。お父さんとのデート、楽しかった。

日付	報告者	活動内容
8/22 (金)	中野 未涼	今日は一緒に授業したクラスの子や違うクラスの人たちがたくさん来て、送別会をしてくれた。とても寂しい気持ちでいっぱいだったけど、また皆と会えると信じたい。
	加納 玲以	今日が学校で過ごす最後の日だった。朝は8年生の日本語の授業に参加した。お昼には私たちのために、送別会を開いてくれた。その時、代表してお礼と感謝の気持ちを何とか英語で伝えることができた。送別会にはたくさんの生徒が来てくれた。ミートパイやお菓子を食べたり一緒に写真を撮ったり、良い思い出ができた。
8/23 (土)	松原 泉	今日の朝食は私が“お好み焼き”を作った。持参した箸にホストファミリーは四苦八苦しながらも喜んで食べてってくれてうれしかった。Donna が私にカンガルーのぬいぐるみとコアラのフォトブックを、Rob と Sylvia から私の家族にTシャツのプレゼントがあった。とてもうれしくて感激した！
	山本 里穂	街の大きなショッピングモールへ買い物に行った。かわいい服がたくさんあったので買った。店内には『ダイソー』もあって、日本のこと少し思い出した。夜は、ホストファミリーと一緒に過ごす最後の夜。写真を撮ったり、ゲームをしたり、心に残る素敵な1日だった。
8/24 (日)	藤井 菜々子	朝食はホストマザーが前に作ってくれたパンケーキがもう一度食べたかったのでリクエストして作ってもらった。やっぱりとてもおいしかった。おばあちゃんがいる老人ホームやおじいちゃんの家に行き、お別れをした。「また来てね」と言ってくれた。午前11時30分、とうとうお別れの時間がきた。10日間ホストファミリーは私のために色々な所へ連れて行ってくれ、たくさんの優しさをくれた。別れるのはすごく悲しくハグされて涙が止まらなかった。「またいつか会おうね」と約束してバスに乗った。
	加納 玲以	今日でホストファミリーとお別れ。バスを待っているときバディやそのお姉ちゃんが泣いて別れを悲しんでくれて嬉かった。自分もすごく悲しかった。最後に手作りの写真アルバムをくれたときには、泣いてしまった。また来たいと心から思った。フリスピ一先生はブリスベン空港まで来て、飛行機が飛び立つ時まで見送ってくれた。
8/25 (月)	山本 里穂	日本に無事帰国した。家族の顔を見た時はホッとした。日本の家族・オーストラリアの家族、私には2つの大切な家族がいて、いつも私のことを想っていてくれていることに感謝したいと思った。この12日間の経験と楽しかった思い出を、これから的人生に生かしたいと思う。



かのう れい
加納 玲以

(埴生中学校 3年)

■計画(PLAN)

今回の派遣にあたり私は、2つの事を頑張りたい。1つ目は日本とオーストラリアの違いをたくさん見つける。オーストラリアと日本では、生活習慣や、食文化、宗教など様々なことが違うと思うのでそれを肌で感じたいと思う。

2つ目は現地の人とコミュニケーションをたくさんとつて自分が使える英語を積極的に話し、たくさんの友達を作ること。普段あまり使わない英語なので不十分かもしれないが、身振り手振りで頑張りたいと思う。そして、充実した素晴らしい体験をたくさんしてきたい。

■行動(DO)

知らないことは積極的に聞いた。特にオーストラリアの珍しいものなどに関しては聞き逃さないように気をつけた。その他にも、料理の手伝いをしたり、高校では好きな音楽やスポーツ、趣味を聞いて相手との共通点を探したりした。私は英語を聞いて理解することは多少できたので、『なるほど！』と思うことは結構あった。特に高校では日本で事前に人気の音楽やスポーツを調べていたので、好きな音楽が一緒だったときなどは、すごく盛り上がれた。初対面の人と話をするには、やっぱり積極的に相手を知ろうとする気持ちが大切ということを感じた。

■評価(SEE)

85点

今までの自分からは考えられないくらい積極的に活動することが出来た。でも、もっと話せたらよかったです。また、相手を知ろうと努力したり、疑問に思ったことをすぐに質問し、積極的になることが今回のホームステイで得られた。そしてこの経験を仲間に発信し、同じ考えを共有できるように、ホームステイで培った積極性を活かしていきたい。

レッドクリフ高校の授業にて

私はオーストラリアに滞在した10日間の中で3日間授業に参加できましたが特に心に残っています。日本語の授業だけでなく、英語や数学、理科など色々な教科の授業を受けさせてもらいました。



レッドクリフの生徒は、みんな熱心で私語もなく、とても落ち着いて授業を受けていました。先生の授業の進め方は日本の先生とさほど変わりなく、少し違ったのは授業中よく電子機器(パソコンや iPad)などを使っている生徒を見かけたことです。小学校に行ったときも、生徒にパソコンに慣れもらうため、図書室に何台もパソコンが置いてありました。

21日に8年生(中学2年生)の日本語の授業に参加した時はとても楽しかったです。日本人が珍しかったようで、たくさんの質問を受けました。日本語を使って質問してくれた生徒もいてとても積極的な生徒ばかりでした。8年生の先生から日本とオーストラリアの学校の違いについて聞かれたとき、私は日本の生徒は自分たちの学校を掃除する時間があることを教えました。日本では当たり前のことだけどオーストラリアではそういう習慣がないので、新鮮に感じたのか興味を示して8年生の皆がたくさん日本の学校の掃除について質問してくれました。日本について少しでしたが伝えることができて良かったと思いました。



レッドクリフの生徒のみんなは、とても勉強熱心で学校での授業を楽しんでいるように思いました。そ

ういう日本とは違った授業の雰囲気を身をもって体験する機会を与えてくださった、すべての人とのつながりや出会いを大切にして、この貴重な体験を今後の学校生活に生かしていきたいと強く思いました。



ホストファミリーの紹介

Ortega家

父	Carlos
母	Maria
娘	Rocio
娘	Christina
娘	Cassie

ホームステイ報告書

私のホストファミリーは五人家族でした。ホストファミリーはみんな優しく、仲がよく暖かい家庭でした。ペットもいて私の家の家族構成とほぼ変わらなかつたため、初日からリラックスして過ごすことができました。

ホストファミリーのこと印象的だったことは、ホストファザーとホストマザーの出身国についてです。ホストファザーはスペイン出身、ホストマザーはペルー出身でした。オーストラリアが多民族国家ということは知っていたけど、それでも驚きました。ホストファミリーはいろんな国を旅行していて日本や中国、ヨーロッパなどの写真を見せてくれました。家の中にも行った国々の物がたくさん飾られていました。特に日本はすごく好きだと言っていました。

バディや、お姉ちゃんは日本のアニメが好きでアニメについて話しているときはすごく盛り上りました。私が知らないアニメもたくさん知っていて、色々教えてくれました。

2日目の夜にはみんなで巻き寿司を作りました。のりも日本製でホストファザーは巻き寿司を作るのがとても上手でした。具はアボカドやサーモン、ツナなどで醤油をつけ、箸を使って食べました。



10日間すべて楽しかったし、驚いたことや発見したことでもたくさんあったけど、特に印象的だったのは、2日目に行った『Underwater World』という水族館です。そこは、オーストラリアの中でも有名な水族館でアシカのショーを見たり、魚、クラゲ、サメ、ワニなどその他にもいろんな海の生き物を見ました。そのときホストファザーが生き物の名前や特徴などを丁寧に教えてくれました。お昼ご飯は近くのレストランで食べました。自分の家族の話もできたり、質問にも知っている単語を使って答えることができました。帰り際、近くの海へ行きました。気温もそんなに高くないのに泳いでいたり、サーフィンをしている人がいて驚きました。とてもきれいな海でバディたちとたくさん写真もとりました。それまであまりしゃべらなかったキャシーともたくさん話せたし一緒に音楽を聴いたりして、2日目に一気にホストファミリーとの距離を縮めることができました。

初めて外国に行き一般家庭にホームステイしてみて、宗教や食文化の違いや、家の中は靴で過ごすことなど日本では考えられない事を体験することができました。そしてその国のスタイルを受け入れることや、何にでも好奇心を抱くことが大切だと感じました。





なかの みすず
中野 未涼

(高千帆中学校 3年)

■計画(PLAN)

私の目標は語学力を高めることと、現地でたくさんの方達をつくり夢に一步近づけるように充実した海外派遣にする。そのために、積極的に自分から行動したり、話しかけたりしてコミュニケーションをとる。

オーストラリアに行く前にたくさん勉強し、オーストラリアの文化や風習を学ぶ。

■実行(DO)

出会う人たちに、たくさんあいさつをした。オーストラリアの人たちは気持ち良いあいさつをいつもかえしてくれ、とてもうれしかった。また、積極的に自分から話しかけた。

オーストラリアの人は、日本のアニメや文化にとても興味を示してくれた。

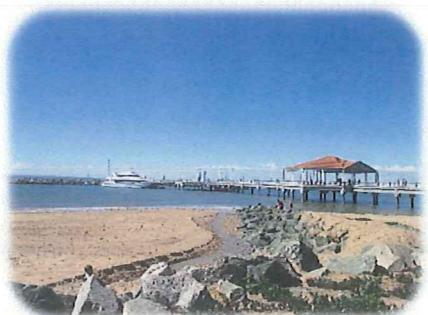
■評価(SEE)

80点

最初はなかなか言葉が聞き取れず、返事をとりあえず返すだけで思うように伝えたいことが伝えられなかつた。行く前にもう少し英語を勉強して行けばよかつたと後悔した。特に単語を覚えるなど基礎的なことを行えばよかつたと思う。

しかし、このホームステイの経験のおかげで、日本に帰ってから、より英語を勉強したいと思った。

この経験を無駄にすることなく次に生かしていくたい。



一生の宝物

私が今回の海外派遣で特に良かったと思うことは、オーストラリアの人々がとても優しくフレンドリーだったことです。学校ですれ違ったときには、あいさつはもちろん、たくさん話しかけてきてくれてとてもうれしかったです。

レッドクリフ・ステート・ハイスクールの生徒たちと一緒に授業を受けたのは、主に日本語の授業でした。みんな真剣にひらがな・カタカナ・漢字を学んでいました。漢字は数え切れないぐらいの数があって、とても書くのが難しいと生徒たちは言っていました。それに比べて英語のアルファベットの文字数は少ないので、もっと勉強しなくてはいけないと改めて気付きました。

そしてオーストラリアの学校の生徒は髪型も自由、ピアスをしても大丈夫なことにとても驚きました。しかしそれによって学校の風紀が乱れる事ではなく、一人ひとりが個性を大切にしていたので、さすが多文化社会だなと思いました。

また、オーストラリアの町は日本と違い町中にゴミが落ちておらず町がキレイで、あまり信号機がありませんでした。家の中ではコンセントの形が日本と異なりカタカナのハの字になっていて、使うときにスイッチを入れて使用するのでとても環境にいいと思いました。



休日はホストファミリーと一緒に過ごし、色々なところに連れて行ってもらいました。海に行ったときは、とても日本とは比べものにならないくらいキレイでとても感動しました。オーストラリアに行った8月は少し寒い時期だったので、泳ぐことは出来なかったけれど、ファザーの David が「次は夏に来てみんなで泳ごう！」と言ってくれてとてもうれしかったです。

今回親、学校の先生方、そして部活のメンバーが支えてくれたおかげで海外派遣に行くことができたことを心から感謝しています。



ホストファミリーの紹介

Brough家

父	David
母	Leissa
娘	Jessica
娘	Rebecca
息子	Lachlan

ホームステイ報告書

私のホストファミリーは5人家族でとても優しくにぎやかな家庭でした。ファーザーの David はとてもおもしろく、いつも冗談を言って笑わせてくれました。マザーの Leissa はとても優しくいつも私に「自分の家と思って過ごしてね」と気をつかってくれました。長女の Jessica は青色の髪の毛が特徴的でとてもおもしろく、いつも私に「一緒にゲームをしよう」と誘ってくれたり、好きな日本のゲームやアニメについて一緒にたくさん話しました。次女で私のバディの Rebecca はとても優しく困ったときは助けてくれて、いつも明るいのが印象的でした。彼女は今年高校を卒業するので、いつも夜遅くまで勉強をしていました。また、彼女はとても真面目なので日本語についてわからない事をいつも私に質問で聞いてくれたので、私も英語でわからないところを彼女に聞き、お互いに教えあったりできたのでとても良い経験となりました。



長男の Lachlan はとても優しくて、いつも一緒に遊ぶことが多かったです。たまたま同じアニメが好きだったこともあり、よく一緒に見ました。

私のホストファミリーはいつも休日は色々なところに連れて行ってくれました。シーワールドやシーマーケット、海の近くでピクニックをしたりと、とても楽しい思い出



でいっぱいです。オーストラリアに居た10日間、毎日がとても充実していたので、お別れするのがとても寂しく、帰国する日は朝からずっと泣いてしていました。

私のバディの Rebecca の夢は日本語の先生になることなので、いつかお互いに夢を叶えて再開したいです。とても良い思いでと経験になりました。





ふきあげみく 吹上 実来 (厚狭中学校3年)

■計画(PLAN)

- ずっとしゃべれなく、ほとんどがジェスチャーにならな
いように、今使える英単語を組み合わせて文を作り、
間違えたら間違えたで、誤った使い方や正しい使い
方についての違いを発見し、学んでいきたい。
- 積極的にオーストラリアの人々に話しかけ、英会話に
慣れていきたい。それから、互いに教え合っていきた
い。

■実行(DO)

英語で話すことは、思った以上に難しかった。自分の計画に書いたように、わかる単語を組み合わせて伝えようとしたが、うまく伝わらず、自信を無くしてしまった。しかし、オーストラリアの人々はみんな優しく、「大丈夫、何とかわかるよ。」と言しながら頑張って日本語で会話をしてくれた。

今回のホームステイで、思っていた以上に言おうと思った単語が分からなかつたりしたので、もっと語句を勉強すればよかったと思う。

■評価(SEE)

70点

後の30点は自分の英語力のなさ。知っている言葉が少なかったので、文章にして喋ることが出来なかつた。分からなかつたところを、バディやオーストラリアのみんなが日本語に直して教えてくれた。しかし、ただひたすらジェスチャーをつけて話していたら、しゃべれるようになつた。だから70点。この経験を生かし、もう少し単語を勉強してスラスラ喋れるようになりたいと思った。



伝えきれないたくさんの気持ち

私はオーストラリアでたくさんの経験をし、学んできました。出発前は、自分の英語力にあまり自信がなく、ましてや会話なんて…と不安がありました。結団式の時、「できなくても、あきらめずに頑張ります。」と宣誓したこと胸に刻み、「なんとかなる、なんとかなる。」と自分を励ましながら出発しました。『失敗しても、持ち前の明るさでなんとか乗り切ってやるぞ！』と思っていました。

初めて外国の学校に行き、オーストラリアの生徒と授業と一緒に受けましたが、話すのが早すぎて何を言っているのかよくわからず、戸惑いの連続でした。今の自分のできる限りの英語を使って話し始めましたが、伝えようと思った言葉の単語が分からず、言いたいことが伝えられず、不安がどんどん高まりました。しかし、バディと対面した後、緊張しながらも話していたら、バディは日本語で答えてくれました。バディは、頭がよくて、日本語もよく知っています。翻訳機を使って英語を教えてくれ、私の言っていることをなんとなく理解しようしてくれました。相手の

言語で知っている単語をお互いに言い合うことで、なんとなく思いが伝わるようになりました。3日目ぐらいから不安が解け、楽に話せるようになりました。不思議なことに、不安がなくなると落ち着いて話せるようになり、授業中も進んで生徒たちと関わることができました。

家に帰っても、ホストファミリーが、私が分かるまでジェスチャーしたり、辞書を使って教えてくれたりしました。英語力の未熟な私に、いつも優しく、笑顔で話しかけてくれました。私はすごく感謝しているし、何度も救われました。他にも、生徒や先生、知らないお店の人など、色々な方に助けてもらいました。伝えきれないほど「ありがとうございます」と言いたい気持ちでいっぱいです。

「コミュニケーションをとることが大切だ」とよく学校で言われています。コミュニケーションをとるということは、相手を思いやる心と感謝する心が生まれてくることなんだなと感じました。小さい頃からの夢だったホームステイ。たくさんの方々のおかげで、本当に充実した日々を送ることができました。この大きな経験をいかして、これからも夢をもって生きていこうと思いました。





ホストファミリーの紹介

Booth家

父 Chris
母 Ana Dasilva
娘 Juliet

ホームステイ報告書

ホストファミリーは、本当にみんな優しくしてくれました。ファザーは、家のことや困ったことがあったらすぐに教えてくれたり助けてくれたりしました。何もなくとも、「何か困ることはある？何か飲む？何かしたいことはある？」など、いつも気を使ってくれました。

マザーはオーストラリアのことをたくさん話してくれて、日本をたくさん聞いてくれました。それに、おもしろいことを言ってくれるので、喋るときはいつも楽しかったです。特にオーストラリアのことで驚いたことは、道路が日本より広く、みんなスピードを出しているということです。実際に、ファザーが急いでいる時に、すごいスピードを出して走っていたので、とても驚きました。

ジュリエットは英語が分からぬときに頑張って日本語で喋ってくれたり、分かるまでずっと教えてくれたりしました。ジュリエットは、日本が大好きなので、東京に2回行ったとか、金閣寺を見に行ったとか、たくさん話をしてくれました。部屋は、ほとんどが日本の物で埋め尽くされていたので、本当に日本が好きなんだなと思いました。3人のおかげで、初め感じていた「英語で喋ることができるか」という不安は、すっかりなくなっていました。

思い出は、伝えきれないほどたくさんあります。特に思い出に残っていることは、買い物に行ったことです。食べるものはすべて買ってきて、オーストラリアについてたくさん紹介してくれました。店でお土産を買ったとき、ジュリエットがレシートを見て、「何かおかしい」とファ

ザーと2人で30分くらい計算して、「お釣りの金額が違う」と店に言いに行ってくれました。自分のことではないのに、私のためにやってくれたことがとてもうれしかったです。そのことにより、Booth 家への信頼がもっと高まりました。Booth 家は、私の本当の家族のようなものです。





ふじい ななこ
藤井 菜々子
(龍王中学校 3年)

■計画(PLAN)

今回の派遣事業での私の目標は二つあります。

一つ目はオーストラリアの歴史や文化を学び、日本との違いを見つけること。そのためオーストラリアの観光地を見て回り、学校でのルールなどを学ぼうと思う。

二つ目はコミュニケーション力をつけること。私は人見知りでなかなか輪に入ることが苦手だけど、自分の気持ちを伝えて、コミュニケーションを取れるように、英語力をもっと身につけ、相手の目を見て会話をしたり、ジェスチャーで表現するなど、色々な工夫をしようと思う。

■実行(DO)

オーストラリアの歴史や文化を学ぶため、ホストファミリーに頼んで色々な場所に積極的に連れて行ってもらった。また、人見知りな性格を少しでもなおせるように、そしてたくさんの友達をつくれるように、自分から話しかけることをいつも心がけて行動した。会話が上手くできない時は、電子辞書を使ったり、ジェスチャーをしたり、絵を書いたりと努力した。

■評価(SEE)

80点

ホストファミリーと生活しているうちに色々な文化の違いを見つけた。一番驚いたのは、玄関やトイレに鍵がなかったこと。治安が良いとは聞いていたけど私は抵抗があった。私のなかでは当たり前のことが他国では当たり前ではないことがとても興味深かった。また色々な工夫をして言いたいことを伝えようとしても、「What?」や「Pardon?」と言われると怖くなり諦めてしまうことがあった。あの時、伝わるまで頑張ればよかったですと悔いが残った。この体験から、何事にも後悔しないように、全力で頑張ろうと思う。

すばらしい時間

オーストラリアの第一印象は何もかもが雄大で緑が豊かで人々がとても温かいということです。初対面の私

に気軽に声をかけてくれたり、色々な事を教えてくれたり、とても親しみやすかったです。そのおかげでたくさんの友達を作ることがで



きました。学校ではルールが日本ほど厳しくなく、授業中に飲み物を飲んだりするのも自由でとても驚きましたが、先生の質問にはたくさんの生徒が手を挙げて答えています。

休日にはショッピング、大学のオープンキャンパス、ビーチ、親戚が酪農を営んでいる牧場、両親の職場などに連れて行ってもらい、大学は日本では見たことのないような整った環境で専門的な学習をしていて、とても興味を持ちました。牧場では初めての乳しぼり、両親の職場では救急車に乗ったり、中にある医療器具の説明なども聞くことができ、とても貴重な体験となりました。

私も日本の食文化を少しでも知ってもらうために、『肉じゃが』を作りました。牛肉がよかったのに鶏肉が出



てきたり、残った出汁をバディーが飲んでしまったりとハプニングもあったけど、代表的な日本食を再現することができました。

バディーのローラに

浴衣を着せてあげると、すごく喜んでくれ、持って行った紙風船は破れるまで遊ぶほど興味を持ってくれました。このように、自国の文化をお互い教え合い、違いを受け止め、良い所を吸収し、自国の文化をより良いものにしていくことは、とても大切な事だと思いました。

10日間のホームステイで、言葉や習慣が違っても、お互いの心が通じ合えば、慣れない環境でも助け合い、分かり合うことができる！！ということを学びました。書き尽くせない程の貴重な体験は私の将来にきっと役立つと思います。

最後に、今回の私たちの派遣事業を応援してくださった全ての方に心から感謝し、一生の大切な思い出ができたのは、たくさんの方々の支援があったからだということを忘れずに、これからもっともっと努力し、色々な事に挑戦して成長していきたいと思います。



ホストファミリーの紹介

Powell家

父 Glen
母 Teresa
娘 Laura
息子 Samuel

ホームステイ報告書

ホストファミリーと初めて会った時、会えた喜びより、「大丈夫かなあ…」という不安で一杯でした。でも、そんな私をホストファミリーは「よろしくね」と笑顔で優しく迎えてくれました。いつも私のことを気にかけて「何が食べたい?」「どこ行きたい?」「Wiiで遊ぶ?」など話しかけてくれていたから、少しもさみしいと思う時間がありました。家ではいつもみんなの話し声、笑い声が響きわたっていました。見た目は怖いけど本当はとても優しく、いつも私のことを気遣ってくれたホストファザーのグレンと、料理が上手でいつも笑顔のホストマザーのテレサは救急車の運転手です。朝早くから夜遅くまで働き、ファザーは呼び出されることも多かったです。仕事で忙しいのに、マザーは私を職場へ連れて行ってくれました。

日本とは違
いとてもカラ
フルな救急
車。ユニホ
ームに着
替え、乗せ
てもらい、中に
ある色々な医療器
具を見せてもらったことはとても貴重な体験でした。



バディーのローラは私と同じ人見知りのようで初めはなかなか会話が弾みませんでした。でも、学校でできた友達のサポートもあり、徐々に打ち解け、ガールズトークで盛り上がることができました。今もメールのやりとりを楽しんでいます。

お土産に持っていた
浴衣を着せてあげた時
はとても喜んでくれて、
私に飛びついてくれ
ました。

弟のサムエルはとても人
懐っこく「ななこ！なな
こ！」とよく声をかけてく
れました。毎晩のように
Wiiをしました。予想して
いたより私が強かったみたいで、はぶてしていました。



休日には色々な所に連れて行ってくれました。一番
楽しかったのはクイーンズランド大学のオープンキャン
パスに行ったことです。これから自分の進路について
も考えることのできる一日でした。10日間、私が不安や
寂しさを感じることなく楽しく過ごすことができたのは、
ホストファミリーが本当の家族のように接してくれたから
だと思います。Powell一家とお世話になったみなさんには
心から感謝しています。これからもホストファミリーとメ
ールなどで交流を続け、いつか再会できる日を楽しみ
にしています。



まつばら いずみ
松原 泉
(小野田中学校3年)

■計画(PLAN)

- オーストラリアの文化、習慣を肌で感じ、体験を通じて新しい価値観や考え方を身に付ける。
- ホームステイ先ではゲストではなく、家族の一員となるように挨拶をしたり、自分から手伝いをするなど積極的にコミュニケーションをとる。
- 山陽小野田市の代表として派遣されたことを忘れず、健康に留意し有意義な12日間を過ごす。

■実行(DO)

文化習慣の違いを様々な場面で目にし、体験できたことは貴重な経験となった。また自分自身を考え、見つめ直すきっかけにもなった。

学校やホームステイ先で初めは気負いすぎて会話がぎこちなくなってしまったが、日が経つにつれ自然にコミュニケーションがとれるようになっていった。まさに「習うより慣れろ！」だった。

■評価(SEE)

90点

英語を身に付けるには、ホームステイのように生活を共にし、英語環境の中に自分をおくことが上達の近道だと痛感した。語学を学ぶことがより一層楽しくなった。この経験は私にとって自信や励みになった。残念だった点は、体調を崩し学校を一日欠席してしまい多くの人に心配をかけてしまったこと。



I owe everything Australia

～すべてはオーストラリアのお陰～

帰国してしばらく経つのですが、オーストラリアでの出来事を毎日のように思い出しています。いつもの慌しい生活に戻ってみて、改めてオーストラリアと日本とでは時間の流れが違うと感じます。

家から一歩外に出るとたくさんの木々に色鮮やかな鳥がとまっていたり、散歩に出かければ真っ青な海や空を見られるモートンベイは素晴らしい街でした。このような自然に囲まれて共存しているからこそ、人々は大らかでフレンドリーなのだと思います。ハイスクールでもそのような生徒たちにたくさん出会うことができました。

オーストラリアは移民によってできた国なので、各自の文化やお互いの違いが尊重されています。そのため学校でいじめが起こったときは、厳しいペナルティがあると現地のフリスビー先生から伺いました。日本にはそういういた罰はありません。それはきっと体罰として捉えてしまうからではないでしょうか。また、校則としてある程度のルールはありますが、ほとんど本人の自主性に任せられているようでした。私たちの学校では考えられないことで、厳しい校則を少しきゆうくつに感じました。

授業の方法についても、オーストラリアは広大な国土のため、インターネットやテレビを使った授業が行われています。外国語教育も盛んで生徒が日本語を一生懸命に学んでいる姿に、私も刺激を受けました。この貴重な体験を生かしこれから自分の成長に繋がるよう努力していきたいと思います。最後にこの派遣事業でサポートしてくださった市役所の方々、アドバイスを下さった先生方、応援してくれた友だち、準備を手伝い送り出してくれた家族に感謝しています。本当にありがとうございました。





ホストファミリーの紹介

Korendijk家

父 Rob
母 Sylvia
娘 Donna

ホームステイ報告書

ホストファーザーの Rob は、ユニークでいつも皆を笑わせてくれました。ガラス会社に勤務していて、外出先のお店でファーザーの会社のロゴの入った窓ガラスを見つけました。ホストマザーの Sylvia は、親切で温かい人でした。お肉が大好きな私にたくさんお肉料理をふるまってくれました。今でもマザーの作ったミートパイが無性に食べたくなります。何か心配ごとがあつても、

「Don't worry」で解決！

バディの Donna は、一つ年下ですが、何かと私を助けてくれ頼りになる心強い存在でした。ホームステイに行く前に行っていた事前のメールのやりとりで『ポケモン』が好きなことは知っていましたが一緒に過ごすうちにお互い『ハリー・ポッター』にはまっていることがわかり、滞在中は二人でよくハリー・ポッターの DVD を観っていました。Donna には他に兄と姉が二人いるそうで、今

は離れて住んでいるので少し淋しいようでした。でも家にはペットがたくさんいたのにぎやかでした。(犬2匹・アオジタカゲ・
金魚・ハムスター・オウム)

Korendijk 家は以前オランダで暮らしていたので、普段はオランダ語で会話をします。英語が第二言

語なので私にも発音が聞き取りやすかったです。

ホストファミリーには休日だけでなく、学校が終わってから帰りに車で色々なところに連れて行ってもらいました。その中でも競馬場は初めてだったので、間近で見たレースに大興奮でした！！

帰国する前日の朝、私は今までの感謝の気持ちを込めて『お好み焼き』を作りました。持参した箸に手こずりながらも「It's beautiful！」(オーストラリアで美味しいの意味)と言って喜んで食べててくれたので嬉しかったです。

バディと別れるとき「Donna が日本に来たら、今度は私が案内するね！」と約束をしました。再会できる日が楽しみです。Korendijk 家は私にとって最高の家族でした！





やまもと りほ
山本 里穂
(厚陽中学校 3年)

■計画(PLAN)

1つ目は、これまでに学んだ英語力を十分に發揮し、積極的にコミュニケーションをとり、自分に足りない部分をしっかり学ぶ。

2つ目は、オーストラリアと日本の文化や習慣の違いを見つける。

3つ目は、ホストファミリーや出会う人達と、常に笑顔で仲良く楽しく過ごす。

この3つの目標を達成するために、体調管理に気を付けて責任ある行動をとるよう心がける。

■実行(DO)

たくさんの人と出会ったが、常に心がけたのは笑顔とあいさつ。そして、失敗を恐れず思ったことは出来る限り言葉やジェスチャーで表現するようにした。

ホームステイ先・学校・街のいたるところで、文化の違いや習慣の違い、オーストラリアの良さを肌で感じることができた。

■評価(SEE)

60点

相手の話すことを理解するのは1日1日時間がたつにつれ少しずつ出来るようになったが、自分の気持ちを英語で伝えるのは最後までとても難しいと感じた。

しかし、「どうにかなる」という強い気持ちで消極的にならず前向きに考え方行動したこと、相手とのコミュニケーションがとれるようになったことは自分の自信につながったような気がする。これまで以上に勉強しないと世界では通用しないと実感した。

夢への第一歩

私は小学生の頃から英語に興味があり、いつか外国に行ってみたいと思っていました。中学生になりこの派遣事業のことを知り迷わず応募し、そしてオーストラリアへ行くことが決まりました。

まずオーストラリアで驚いたことは、食文化の違いです。滞在した10日間の中で私は一度しか米を食べませんでした。肉中心の食事で、ポテトや温野菜が添えられています。パンやシリアル、フルーツや甘いお菓子をよく見かけました。私も肉料理は好きですが、これほど毎日食べたことはありませんでした。

レストランに行ったとき、生まれて初めてワニとカンガルーの肉を食べました。口に入れるのはとまどいましたが、食べてみるとワニは鶏肉のような味でカンガルーは牛肉と変わらない味でした。この食生活の違いは、日本人とオーストラリア人の体格の差に表れているような気がしました。

もう一つ驚いたことは、街全体が美しいということです。歩道も車道も広くガードレールもありません。芝生とコンクリートで整備されているので日本とは違い圧迫感がなくとも開放的な気持ちになります。道路に「カンガルー注意」の標識が立っていたのは、オーストラリアならではだと思いました。日本とオーストラリア、いろいろな文化や習慣の違いはあるけれど、日本でしか生活したことのない私にとっては、すべてが新鮮でいい経験となりました。人の優しさや温かさに国境はないと思った。



最後に、私にはこれまで児童福祉士になりたいという夢がありました。今はもう一つの大きな夢がきました。それは、世界を飛びまわるCAになることです。この夢の実現に向けて、オーストラリアで経験した様々なことや自分に足りないところを勉強し心も磨き、夢へ前進していきたいと思います。





ホストファミリーの紹介

Robinson家

父 Stephen
母 Debbie
息子 Hayden
娘 Kimberley
息子 Blake
娘 Jodie
息子 Dean

ホームステイ報告書

日本を出発する前、私は7人の大家族のところへホームステイすることを知りました。はじめて会った時、みんなの優しそうな笑顔で迎えてくれたことに安心したのを覚えています。

私のバディは1才年下のジョディ。会ったばかりの私にたくさん話しかけてくれ、いつもそばにいてくれました。ジョディは日本のアニメが大好きで特に『桜蘭高校ホスト部』の話で盛り上りました。日本のアニメは世界中で人気だと聞いていたけれど、本当なんだということが分かりました。

Robinson 家は毎日がとてもぎやかで、活発で、笑いがたえませんでした。休日にはいろいろな所に連れて行ってもらいました。ビーチでのバレー、ボールはチ

ムをつくって試合をしました。ビーチで見たオーストラリアのエラルドグリーンの海と真っ青な空はこれ

まで見た景色の中で1番美しかったです。日本で経験したことのない教会でのお祈りも心に残っています。大人も子供も声を合わせて歌い、その歌声は今も心に響きます。



家では、食事の前や寝る前にみんなが集まりお祈りしました。「Un～Pa」と声をそろえて言いますが最初は何をしているのか分からなくて戸惑っていると、この意味が Robinson 家でお決まりのあいさつのようなものだと教えてもらい、家族の仲の良さを実感しました。



10日間オーストラリアで過ごした時間 Robinson 家の人々との出会いは、私にとって一生の宝物です。まだまだこの家族と過ごしたいと思っていた自分に、人と人とのかかわりがこれほど大切でかけがえのないものだとその時気付かされました。

またいつか、もっともっと自分自身成長してオーストラリアの私のもう一つの家族に会いに行きたいと思います。





きたやま さくら 北山 桜

(高千帆中学校教諭)

■計画(PLAN)

- 6人の生徒たちが滞在中に安全で有意義な生活が送れる様、学校で会う時によく話を聞いたり様子を見るなどし、必要に応じて出来る限りの支援をする。
- オーストラリアの文化や習慣に触れることで、自国との違いを認め、自分が高校生の時に訪れた場所がどのような発展を遂げているかを確かめる。
- 現地の学校で授業を参観する際、指導法や教師と生徒の関わり方をよく観察し、帰国後に自分の授業で生かせるヒントを見つける。

■実行(DO)

- 生徒6人の心身の健康状態を常に気遣い、ホストファミリーと順調にコミュニケーションが取れているか、また困っている事はないか等をよく話を聞くようにして日々の様子を観察した。体調不良等の問題が起きた時にはフリスピー先生と連携して支援を行った。
- 自分が以前に訪れた時の写真を持って行き、ホストファミリーのおかげで同じ場所で再び写真を撮ることができた。約20年ぶりの before-after の比較が出来たことは感動的だった。また今のオーストラリア事情をいろいろ聞くことができた。
- 小学校・中高校において複数の授業を参観し、授業の形態や進め方に色々なアイディアを見つけ、たくさんのヒントを得ることができた。

■評価(SEE)

85点

現地の学校関係者、そして何より活動的なホストファミリーのおかげで、短期間に色々な所に行き、たくさんの人に出会って話すことができた。今回2回目となるオーストラリア滞在では、引率教員として学生のときは違う目線で多くのことを体験し感じることができ、有意義なものとなった。生徒たちのたくましさや日々成長していく姿を見守ることができ、うれしく思っている。

授業に関しては、今回得たヒントを今後の教科指導に生かしたいと考えており、課題としては、もっと英語を使いこなせる日々のトレーニングが必要だと感じた。

レッドクリフでの授業の様子について

今回の海外派遣事業において、拠点となったのはレッドクリフ・ステート・ハイスクールである。学制制度は州によって異なるそうだが、この学校には7年生(中学1年生)から12年生(高校3年生)が在籍しており、日本で言う中学校・高校の区別はない。



私たちは、この学校の日本語教師で受入れを担当されている、フリスピー先生の日本語の授業に主に参加した。3~4人のグループに日本人が1人ずつ入り言語活動に加わる。

日本語の練習で、ハイスクールの生徒から日本の生徒へ質問をして行く形式だった。先生が作られた活動用の質問シートが配られ、そこには日本語で書かれた質問・読み方を示すローマ字・意味を示す英語があらかじめ書いてある。それを読みながら質問し、日本の生徒が答えた内容をグループの皆がそれぞれの用紙に記入する。質問の内容は、例えば中学1年生レベルなら「お名前は何ですか。」「家族は何人いますか。」などで、学年により文の難易度は変わることが、同じパターンの文を何度も声に出して練習し、書くよりも会話のほうに重点が置かれている活動だった。皆、集中して取り組んでいる姿が印象的だった。日本の生徒たちも最初は緊張気味に話していたが、徐々に慣れて来ると、ジェスチャーを交えたりしながら積極的にコミュニケーションが取れるようになった。

オーストラリアでは日本のアニメやマンガ、ゲームが大人気で、日本語を勉強したいと思っている人は多いようだ。こういう話になると大いに盛り上がり、国境を感じさせない共通の話題になっている。家族で日本に行ったことのある生徒も多く、また日本にぜひ行ってみたいという生徒もたくさんいてとても嬉しく思った。

日本語の教室には日本各地のポスター、地図や写真も貼ってあり、生徒たちが興味を持ち、また授業中の説明で使える様に掲示に工夫が凝らしてあった。教室の奥には畳を敷いた和室、そこから見える外には小さな日本庭園が造ってあり、日本の雰囲気が味わえた。

他の先生の日本語授業や、数学、物理などの授業にも参加し、教師それぞれの教え方、クラスの雰囲気を味わうこともできた。全体的に、授業は講義形式の一方通行的なものではなく、グループ活動が多用されている。教師と生徒のインタラクティブなやり取りはとても活発な印象を受けた。これから自分の自分自身の教科指導において様々なヒントを得ることができたので、良いところは積極的に取り入れて自分の授業改善に役立てたい。



ホストファミリーの紹介

Holohan家

夫 Patrick
妻 Merrilynne

ホームステイ報告書

私がホームステイをさせて頂いたところはホロハン家で、とてもエネルギーのある65歳の夫婦二人住まいのお宅だった。お父さんのパトリック、お母さんのメリリン共にとても穏やか＆明るい性格で、特にメリリンはおしゃべりが大好き。そのおかげで私は10日間ずっと英語のシャワーを浴びることができ、リスニングが随分鍛えられた。メリリンとは主婦目線での共通の話題が多く料理やガーデニング、子育てや仕事の話で盛り上がり、気付いたらもう寝る時間、という事も度々あった。オーストラリアの習慣や独特の言葉など知らないこともたくさんあったが、興味を持ってメモを取ったりしていると、更に詳しく教えてくれて本当に多くのことが学べた。

今回、自分が高校生の時に派遣団の一員としてレッドクリフを訪れた時の写真を持って来ていたので、それを見せると言った。「あなたがここにいる間に、この写真と同じ場所を探して、また写真を撮りましょう。その写真を並べてアルバムに入れたらステキよ。」と嬉しいことを提案してくれたのだ。放課後には市内をあちこち回り、私のかすかな記憶とメリリンの推理と、色々な人の助言を頼りに懐かしい場所を探してカメラに収めていった。メリリンはそれを

「before-after ツアー」と呼び、喜んで連れて回ってくれた。その行動力に驚かされると共に、温かい心遣いに本当に感謝している。

週末はパトリックの仕事が休みなので三人で出かけ、広大な畠でいちご狩りをしたり、美しいビーチを散策したり、ラグビーに似たオーストラリア独特のフットボール観戦に行ったりと、様々な体験をして楽しめてもらった。ある日の晩には、お二人の共通の趣味であるスカッシュで知り合った仲間との持ち寄りパーティに参加させてもらった。ホロハン夫妻はとても社交的で、この様な人ととのつながりをとても大切にしている。人との出会いを貴重なチャンスと捉え、更にその関係を継続させていくことが大事なのだと私に教えてくれた。

最後の朝。あつという間で信じられない気分だったがついにその日が来た。「私たちはお別れでも泣かないわよ。だってあなたはすぐに戻って来るって信じているから。」と言われ、私の方は涙をこらえるのに必死だった。今回私に与えて頂いたこの素晴らしいチャンスと出会いは、一生の宝物になると思う。本当に心から感謝している。3回目、またオーストラリアの地を踏むのもそう遠い日ではないと思う。また1つ新たな目標ができた。

